

## アメリカ60年代世代の今： トム・ヘイドンの思想の変遷と継続

塚 田 守

The Sixties Generation Now in The U.S. :  
Changes and Continuities in Tom Hayden's Thoughts

Mamoru TSUKADA

### はじめに

この小論は1960年代に学生活動家として活躍した1人の「60年代世代」の現在をライフ・ヒストリーの手法を用いて論じるものである。具体的には、公民権運動、ヴェトナム反戦運動を含むさまざまな抗議運動に参加し「1960年代世代」のシンボリック的存在であり、「民主社会をめざす学生」(SDS)の初代委員長であったトム・ヘイドンに焦点をあて、彼の思想的変遷と継続について論じる。ヘイドンは公民権運動家、反戦運動家、あるいは、シカゴ・セブンの一人として、「ラディカル」と呼ばれていたが、現在カリフォルニア州議会の上院議員であり、民主党と「緑の党」の支持を得て1996年にも再選している。また、1997年4月8日にロサンゼルス市長選挙に出馬し、「保守派」を代表した億万長者のリチャード・リオーダン市長に敗れた<sup>1)</sup>。

この論文は、まず、トム・ヘイドンがどのような契機で学生活動家になり公民権運動に関わり、ヴェトナム反戦運動に参加していったか、1960年代の彼の行動と思想を概観する。次に、ヘイドンが一時的な政治活動の停止後活動を再開し、上院選挙に出馬した契機と主張した思想について論じる。第3に、1982年にカリフォルニア州の下院議員に当選し上院の議員になってから、政治家としてのヘイドンはどのような主張を行い行動したかについて述べ、ヘイドンの行動と思想の現在について論じる。

### 1 「60年代世代」とトム・ヘイドン

60年代世代の解釈については別の論文で論じているが<sup>2)</sup>、1960年代世代におけるトム・ヘイドンの位置を明らかにするために、それぞれの解釈の概略を述べる。1960年代世代についての解釈には3つの立場があると考えられる。「サイレント・マジョリティー」からの解釈は、60年代世代は「アメリカ人に精神的退廃を起こさせ、破壊行為をやった」だけで、「エリート主義」と「欲望のままの生き方」をしたに過ぎないと、60年代世代の否定的意味を強調するものである<sup>3)</sup>。第2の解釈として、「運動転向者たち」によれば、60年代世代は「破壊的世代」と呼ばれるべきで、彼らはアメリカの信念を揺らがせたと批判する。彼らの論理は「抽象的」で「全体主義的」な考えを前提し、「過激な行為」に従事し

ただで、自らの「道徳的優越性」の強調というドグマを持っていたと批判する<sup>4)</sup>。第3の立場としては、「初期 SDS メンバーから」のもので、初期の SDS の公民権運動への参加は「英雄的な個人的コミットメント」であったが、1965年以降の SDS は「派閥争い」とニヒリズムが入り交じったものであったと後期 SDS を批判する立場である<sup>5)</sup>。同様に、初期 SDS の運動のめざしたものは今も継続されており、後期 SDS の持った「革命主義」「組織としての SDS の問題」「若者として反逆の立場」は SDS の本来のプロジェクトの実行には不適當であったと後期 SDS に対して批判的である者もいる<sup>6)</sup>。トム・ヘイドンは、60年代世代を第3の立場で解釈し、自らその立場を継続し、政治家として初期 SDS の思想を引継ぎ行動していると評価される。

「60年代世代」は多様で、政治活動をする者たちだけではなかった<sup>7)</sup>。むしろ、政治活動をした者たちは同世代では少数派であったとも言える。しかし、彼らは他の同世代の人々とは異なった特徴を持ち、社会的改革に一つの役割を果たしていたようだ。そして、さまざまな運動に参加した経験を持った者たちは、参加しなかった者たちと比べ、今も、「左翼的政治」志向を持っているようである<sup>8)</sup>。しかし、「歴史を創る行為」(Making History)と「日常生活」(Making Life)との間の調整という「中年の問題」に直面しながら、「全国的で過激な活動」ではなく、「地方的で日常的な活動」を行っている<sup>9)</sup>。元活動家の「転向」に関するメディア報道、また、1980年代からの1960年への「反動」(Backlash)により「60年代世代」は批判されたが、クリントン政権の時代になって、「60年代世代」の再評価がされつつある。

## 2 学生活動家として

トム・ヘイドンは冷戦構造の中での「同調主義志向」の1950年代に生きて、親たちの世代に「理由なき反逆」を感じながらも「アメリカの夢」を持って、名門ミシガン大学に入学した。しかし、そこでの大学生活は「非人間的システム」であり退屈し、授業外活動である「大学新聞」活動に没頭した。その大学新聞の記者としての活動を通して、1) 学生活動家でカリスマを持ったアラン・ヘイパー、2) 抗議行動をしているキング牧師、3) 「理想主義的」ケネディー大統領の演説に触れ、親たちがヘイドンに望んでいた「アメリカの夢」を捨て、「理想主義的リベラリズム」を志向し活動家に変貌していった。

トム・ヘイドンが活動家として生きた1961年から1970年ごろまでは、4つの時期に区分できる。

第1期(1960-62)は、「ポートヒューロン宣言」<sup>10)</sup>を草稿するまでの「リベラル政権」下で「体制内改革」を信じて活動していた時期であった。人種差別のある南部の状況取材し、ヘイドンは南部の人種差別の現実を肌で感じた。南部で経験したことは、南部白人の暴力と公民権運動に援助の手を差し伸べない連邦政府の態度であった。南部での様々な人種差別の現状と南部白人による暴力の現実と直面した経験を踏まえ、北部にも南部の「学生非暴力調整委員会」(SNCC)のような組織の創設の必要を思い、公民権運動の仲間たちと SDS の創立のために SDS の基調になる「ポートヒューロン宣言」を草稿し、組織の宣言とした。その時が名実ともに「活動家トム・ヘイドン」の誕生であった。

ヘイドンによって草案され採択された「ポートヒューロン宣言」の中で、SDS は組織

として、形骸化した代議制民主主義に代わって、直接民主主義の理念に立脚した「参加民主主義」を確立すべきであると主張した。また、その宣言は1960年代の人々が直面する2つの問題は「南部における人種の偏狭」と「原爆の存在で象徴される冷戦構造」であると見なし、それを解決するために、社会的無関心を脱却し、相互依存性に立脚した同胞関係をめざすべきであると強調した。そして、具体的戦略としては、直接行動を志向し、全国的なコミュニケーションを持った抗議運動を展開する、地方分散型の「草の根政治」を志向すべきであるとした。

「リベラルな政府」を理念レベルでのバックボーンとして信頼し、ヘイドンはシュレジンガーに「ポートヒューロン宣言」を手渡し、議会のメンバーに自らの行動計画を訴えた。そして、「リベラリズム」を志向し行動したが、南部での公民権活動家への「暴力」を容認する「リベラルな政府」に不信を持ち、行動すればするほど、「リベラルな政府」の「反共産主義」「冷戦構造」「貧困への不十分政策」を実感し「リベラリズムは非人間的システムの顔にすぎない」とみなし、批判的になっていった時期であった。

その時期は、南部のSNCCで献身的な支援活動をするサンドラ・ケイソン（ケーシー）との出会いの時期でもあり、ケーシーと共に活動することの喜びも大きな時期であった。二人は結婚し、主に南部のSNCCの活動に加わることになった。ヘイドンと共にSDSの活動にも関与したケーシーであったが、SDSの組織が「理論的で、抽象的すぎる」として、南部での活動に戻っていった。そして、この時期の最後にはケーシーとの結婚が破局を迎え、ヘイドンにとって新しい行動を起こす時期でもあった<sup>11)</sup>。

第2期は（1963-64）、ジョンソン大統領のリベラル政権に不信感を持ち、リベラル政権に対して、異議を提唱し「抗議行動」へと進んでいった。「ミシシッピー・フリーダム民主党」が1964年に民主党によって、事実上拒否されたり、公民権運動における黒人と白人の共闘体制が困難になる状況で、SNCCとSDSはそれぞれの基本路線を変化していった。この時期のヘイドンは、経済研究と実行計画（The Economic Research and Action Project ERAP）で他のSDSの12人のメンバーと共にニューアークで草の根レベルでの住民の組織化活動を行った。その時期はまた、ヴェトナム戦争の激化の時期であり、ヘイドンもヴェトナム反戦運動に関心を持ち、北ヴェトナムへの視察旅行にも参加し、リベラル政権に対する抗議の姿勢へ移行していった<sup>12)</sup>。

第3期（1965-67）は、「リベラル政権」に幻滅し、「抗議活動から抵抗活動」へと変化していった時期であった。ワシントンへのヴェトナム反戦運動（1965年）の際に、「企業主義的リベラル」と「人道主義的リベラル」を区別し、政府は「企業主義的リベラル」であり、企業の利益のみを考えているとヘイドンは批判した。また、公民権運動に関しては、カーマイケルが「ブラック・パワー」（1966年）を提唱することに見られるように、公民権運動での黒人と白人の共闘の可能性が消滅し、1967年にはSNCCからすべての白人追放され、ヘイドンの関心と行動は、公民権運動よりは反戦運動へと移行していった時期であった<sup>13)</sup>。

第4期は、1968年がヘイドンにとって象徴的な分水嶺であり、彼が「リベラル政権」から完全に離脱し、「革命」を起こすべき時期であるとさまざまな抗議活動を激化していった時期であった。ヘイドンは、「体制側からの暴力」があり、「抵抗」では十分ではなく、「革命」こそが志向すべき方向であると考えた。その背景には非暴力を唱えていたキング

牧師がヴェトナム戦争と人種差別を関係づけ、「非暴力」を否定し、1967年のクリスマスの演説では「暴力も辞さない」と訴えたことがあった。そして、そのキング牧師が1968年4月4日メンフィスで暗殺され、75以上の都市で暴動が起こり、7万人以上の兵士が動員された。また、民主党大統領候補の有力メンバー、ロバート・ケネディーも暗殺（6月5日）された事件が起き、ヘイドンは政府内での最後の望みを失ったと感じた。さらに、シカゴ民主党大会では、「ヴェトナム戦争を終わらせる全国動員委員会」（MOBE）が正式な民主党大会に代わって、党大会の外で、人々による集会、行進、コンサートなどの「非暴力」な行動を予定していたが、シカゴ市長、リチャード・デイリーがデモと集会の許可を拒否し「厳戒体制」をとり、州兵6,000連邦軍7,500の出動させたが、結果的には、「暴動事件」がシカゴ全体に広がった。ヘイドンはそのシカゴ暴動の扇動者の1人として、後に、陰謀罪で訴えられることになった<sup>14)</sup>。

シカゴ事件の後、様々な大学で反戦運動の一環としてストライキが起きた。その一つのコロンビア大学封鎖（1968年4月23日）では、黒人3,500人の学生と100人の教職員が「戦争に対する静かな抗議」として授業をボイコットし、SDSと元黒人活動家がキャンパスを1週間占拠した。4月30日に警察が導入され「建物の封鎖解除」を行ったが、148人以上が負傷した。さらに、オハイオ州立ケント大学で武器をもたない大学生に対しての発砲事件が起こり、（1969年）死者4人、負傷者9人を出した。ミシシッピ州ジャクソン大学（黒人大学）でも2人が殺害され、9人が負傷した事件などがあり、100以上の大学が学校封鎖された。ヘイドンは、コロンビア大学封鎖などにも参加し、反戦運動のリーダーの1人として活動した<sup>15)</sup>。

反戦運動に参加した後、ヘイドンは「パークレー解放プログラム」「人々の公園」に参加した。この運動はパークレー地域のアングラ紙『パークレー・バープ』の呼びかけで数百人が草や木を植え「人々の公園」としたことに對して、当時のカリフォルニア州の知事が「不当な使用」として、250人の警官を出動させ、金網のフェンスを建て封鎖した。活動家たちのリーダー・シップのもと6,000人が集まったが、その夜、警察と衝突する事件に発展した。

この時期は、また、全国組織として拡大したSDSの組織に大きな変化が起きた。1969年のSDSの全国大会では、イデオロギーの違いが強調され、イデオロギー的に3派に分かれた。労働者との同盟進歩労働派（マルクス主義派）、第3世界との連帯を強調する「革命青年運動Ⅰ」ウエザーメンと、そのライバル「革命青年運動Ⅱ」で、セクト主義が激化し、全国組織自体が事実上崩壊した時期であった。

1965年頃から「ラディカル」化していく過程で、ヘイドンは父親と絶縁状態になっていた。親の世代の「夢」果たせなかったという両親への罪の意識と親世代の無知と矛盾に対する批判が、ヘイドンの心の中で共存していた時期であった。父親とは、1978年に再会するまでその関係が続くことになり、父親との13年間の絶縁状態への悔恨の念は、1996年まで心の傷として残ることになる<sup>16)</sup>。

### 3 体制内政治で「草の根政治の運動家」として（1971-1982年）

体制側からの暴力と運動を続ける生活に疲れたヘイドンは、運動から距離を持った生活

をしていた。そして、直接対決的な政治活動ではないコミュニケーション運動に参加した。新しくできた恋人と彼女の息子などと一緒にレッド・ファミリー (Red Family) というコミュニケーションを作り、警察権力の人々による管理、反戦運動、その他の社会問題などについて考え生活する活動で2年間すごした。しかし、ヘイドンはレッド・ファミリー内での女性問題、さらには、女性差別的であり、権力志向であると批判され、レッド・ファミリーから追放された<sup>17)</sup>。その後、パークレーの「家族」と政治的基盤を失ったヘイドンはロサンゼルスに身をひくことになった。そこで、友人の推薦で、ヴェトナム旅行などの体験やインドシナ半島について大学で講義し始め、1971年の9月には数カ所の大学で非常勤講師として教え、再び社会に関与する必要性を感じた。その年の7月には『ペンタゴン・ペーパー』が『ニューヨーク・タイムズ』から出版され、元政府の官僚、政策分析者たちが戦争に反対し、大新聞の『ニューヨーク・タイムズ』が法的に政府と戦う危険を犯したことにヘイドンは感激した。そして、1972年の選挙に際し、『ペンタゴン・ペーパー』のダイジェスト版を作り配布しながら、体制の中で、執筆、教育活動をしながら草の根運動をする自分に戻り、体制内で働きたいと考えた<sup>18)</sup>。

『ペンタゴン・ペーパー』が出版されたことで、ヘイドンは体制が変化することを確信し、教育と草の根的政治活動に関わり、「体制内改革」を地道にやり始めカリフォルニア州知事の政治志向に賛同し、さまざまな活動をした。そして彼は、マクガバンキャンペーンを支援し、ブラウン州知事に傾倒し行動していたが、ウォーター・ゲート事件とヴェトナム敗戦をきっかけとして、公的行政職による「企業権力」に対しての挑戦として、上院選挙への出馬 (1976年) を決心した<sup>19)</sup>。

連邦上院議員選挙で、「60年代のラディカリズムは70年代の常識になった。」と主張し、「企業の政府」でなく「人々の政府」を訴え、選挙には敗れたものの、120万票を獲得し、「ポートヒューロン宣言」で主張した、「参加民主主義」に代わって、成熟した「経済民主主義」を唱え、リベラリズムを再び志向した。

ヘイドンの政治的宣言である「経済民主主義」宣言 (1976年) では、経済民主主義の原則を中心に以下の10項目を政策として掲げた。1) 経済的権利の宣言、2) 経済上の決定への参加、3) 民主的経済計画と公共企業、草の根の水準と結びついた公共機関の創設、4) 太陽エネルギーと資源保存に重点をおいたエネルギー政策、5) 家族農場と協同組合、農業労働者の適切な労働条件、有機的で栄養分の多い食物、消費者の価格管理を推進する農業政策、6) 地方分権的な、地域共同体を基礎とした社会サービス、7) 有意義な仕事にむけるような雇用政策、8) 少数民族や女性に対しての真の機会均等、9) 進歩的な税制改革、10) 企業の利潤よりも人々の人間としての必要に奉仕する外交政策などであった<sup>20)</sup>。

それは、ヘイドンの5年間の自己反省と運動の結果であり、かつてのSDSの仲間フラックス夫妻、ポール・ポッター、フレッド・ブランフマンなどの手助けで書かれた宣言であり、民主的改革をめざし、「大企業の権力」への挑戦が基本にあった。60年代と同じ様に「個人的レベルでの変革は歴史の変革」を重視し、多元的な政治文化への移行を強調し、「内なるフロンティア」に焦点を当てた。また、60年代とは異なり、民主的で参加型の計画経済を求め、「新たな多数支配による連合政権」への道を模索した。そして、「現実主義的態度」をとり、性急な勝利は期待しない草の根、地方分散型の「運動」を展開することをめざした<sup>21)</sup>。

体制内での草の根の活動を再開した1971年に、ヘイドンは反戦運動に参加してまもないジェーン・フォンダに出会った。その出会いがヘイドンの個人的生活を大きく変化させた。そして、1972年に会った二人は恋に陥り、協同して、「インドシナ平和・キャンペーン」を設立し、反戦運動のために全国を旅行した。1973年のジェーン・フォンダとの結婚式には、母親は出席したが、父親とはまだ絶縁状態のままであった。そして、1976年の上院選挙後2年経った1978年に、父親からヘイドンに一通の手紙が届いた。その手紙は、「トム、もし私の電話番号を知らないといけないので、電話番号は(313) 555-4493です。電話ください。」<sup>22)</sup>という短い文章であった。父親からのこの手紙をきっかけに父親と再会し、父親との絶縁状態を解消し、体制内で活動する精神的基盤を確立したヘイドンであった。

#### 4 体制内政治家として(1982年から現在まで)

カリフォルニア州知事ブラウンの政権内で働き、「60年代」との「象徴的橋渡し」となり、政治活動を続けた。その頃、ジミー・カーターと会い、「愛国的なアメリカ人」と呼ばれるほどに「ラディカル」であるというイメージを変えつつあった。そして、1982年のカリフォルニア州選挙で、イメージを変えるために「家族人」を演じ、「私は以前と同じ怒れる若者ではないが、変革を信じ、コミュニティの改善を信じている」と選挙宣伝で流す戦略で、州の下院議員として当選した。75-82年までの新聞の見出しの多く、「ヘイドンは主流に入りつつある」というものであり、まったくの主流とまではいかないまでも、15法案を提出し、法制化していった。その法制化した内容は、太陽エネルギー、公立学校へのコンピュータ寄付への税免除、ヴェトナム戦争退役軍人のカウンセリングプログラム、高等教育、女性の雇用条件、環境問題などであり、まさに、「リベラリズム」の路線を実践してきた政治家であった<sup>23)</sup>。

さて、最近の政治家としてのトム・ヘイドンの思想と行動は、さまざまな発言と彼自身が草案し提出した法案の中に読み取れる。

高等教育のあり方とアフーマティブ・アクションについて、ヘイドンはロサンジェルス大学の学生新聞のインタビューに答えて、意見を述べている<sup>24)</sup>。その中で、ヘイドンはカリフォルニア大学で議論になっている大学評議員による入学特別枠について批判し、大学の自治の問題として重要な問題であると指摘し、社会的な不平等のなかでの「公立大学」の「平等化」への役割の重要性を主張している。また、カリフォルニア州の大学理事会によるアフーマティブ・アクション廃止決定(1995年7月20日)は、大学側、教授陣、学生によって反対されたにもかかわらずなされ、政治的に決定されたもので、大学の自治の問題として考えるべきであると述べ、アフーマティブ・アクション廃止に反対する立場をとっている。ヘイドンはこの廃止決定は教育における不平等の助長であり、人種差別の根強さを理解しない発想であると批判した。そして、アフーマティブ・アクションの特別枠で入学した成績が下であった黒人の医学生の社会的貢献と比較して、アフーマティブ・アクションに対して「逆差別裁判」を起こし入学した現在のバッキーの社会的貢献を疑問視し、成績と社会的貢献の関係の正当性について批判し、アフーマティブ・アクション廃止を批判している<sup>25)</sup>。

次に、環境問題を考える際に、宗教的側面を考慮すべきであると最近の著書、*The Lost*

*Gospel of the Earth* で論じている。その本の出版に際し、ヘイドンはインタビューに答えて環境問題の重要性について述べている。地球は「聖なる存在」であり、市場原理だけで考えるべきでなく、自然、地球への畏敬の念を持つ必要をヘイドンは説いている。そして、環境問題を考えるために「宗教的要素」を入れるべきとして、企業の「利益」を追求するのではなく、社会全体、公共の利益を視野にいれた環境を考えるべきであるとヘイドンは主張した<sup>26)</sup>。

現在のヘイドンの政治的活動と思想は、彼が1997年5月の時点で州議会に提出している39の法案から読み取れる<sup>27)</sup>。第1のグループは環境問題に関する17法案で、宗教的側面の考慮を強調している。第2のグループのものは、教育問題に関する6法案で、「教育的弱者」の救済と「地域と学校の連携」を強調している。第3のグループとしては、都市問題、犯罪問題に関する11法案で、犯罪の防止、住み良い都市計画に関するものであるが、犯罪の取り締まりを強化するよりも、犯罪防止を重視した法案である。第4のグループは経済政策と人権問題に関する5法案で、中小企業への援助、「社会的弱者」への援助に関するものである。以上の法案の内容に見られるように、ヘイドンの政治志向は、社会的弱者への公的援助を強調し、環境保護活動を重視する、60年代から彼が主張した「理想主義的リベラル」的なものを表現していると言えるであろう。

また、ヘイドンはアメリカには3つの未解決の問題があるとしている最近の論文の中で指摘している。第1の未解決問題は人種民族問題の悪化であると指摘する。現在では、一部の成功した黒人を除いて、多くの黒人は「分離され、不平等」という状態であると批判している。次に、1968年の「法と秩序」の政策の失敗のために15年間で投獄者の数が3倍になったと批判し、犯罪を取り締まるより、防止する方策を取るべきであると主張する。最後に、民衆ではなく、利益集団 (special-interest) が政治経済における民主的プロセスを規定しており、民主政治が実現されていないことを第3の未解決の問題であると指摘している<sup>28)</sup>。このような未解決の問題の指摘に見られるのは、ヘイドンの60年代からの関心ことであった人種問題、犯罪と暴力の問題、民主政治についての問題の重視であり、政治家としてのヘイドンの60年代からの継続が読み取れる。

## 5 60年代を回想して

現在のヘイドンに大きな影響を与えたことは、長い間書こうとして書けなかった回想録の執筆であった。1986年、父親に続き母親をなくしたヘイドンは、中年期に入ったことを実感し、自分の過去から逃げるのではなく、過去を直視し受け入れ、より年をとり成熟した人として、60年代の自分を振り返りかえるために、自分探しの1960年代への旅に出て、特定の人々や重要な場所を再び訪れた。その過程で、60年代に活動した南部の各地やポートヒューロンなどを旅し、元妻のケーシーに会ったり、Home Box Office がシカゴ裁判の2時間ドラマを制作する場にも立ち合い、デリンジャー以外のシカゴ・セブンのメンバーと再会した。その60年代への旅に基づいて書かれた回想録は、ヘイドンに「大きなインパクト」を与えた<sup>29)</sup>。

回想録を書いたことが、ジェーン・フォンダとの離婚の原因になったかという『エクスワイアー』のインタビューに答えて、ヘイドンは言う、「その本を書く事は私に大きなイ

ンパクトを与えました。数ヶ月の間、私は私自身の内面に深く、深く入って行き、私の過去に戻って行きました。同時に、私とジェーンは離れてしまっていました。…確かに、それは離婚の原因ではないが、その時経験していた何らかの転機に私を陥らせました。それは、つねに過去を復活させる私の重要な知的で感情的な経験でした」<sup>30)</sup>。回想録を書いて間もなくして、ヘイドンはジェーン・フォンダと離婚した。離婚の原因として、ヘイドンの女性問題、飲酒問題などと言われたが、ヘイドンの1980年代の醜悪な行動は、ヘイドンほどには政治や社会問題について深く考えないが、彼以上の権力を社会から巧みに勝ち取っていた彼の妻、フォンダとの「辛い個人的な権力闘争」の兆候であったという指摘もある<sup>31)</sup>。あるいは、「私の決心は私の個人的感情とトロイにとって何が良いかによるものだ」というトロイに対しての父親としての決心であったかも知れない<sup>32)</sup>。

1990年にサンタ・モニカ市議会に現れた時、ヘイドンは酒酔状態で騒ぎ、個人的には最悪の状態であった。しかし、彼は翌日から飲酒を克服した。そしてその後の現在の妻であるバーバラ・ウィリアムズとの出会いがヘイドンを大きく変化させた。ウィリアムズはカナダ人で宗教心の篤い、地球との精神的結びつきを心から信じていた女性であった。環境問題に関心を持っていたヘイドンはウィリアムズに精神的な結びつきを感じた。この彼女との出会いにより、ヘイドンは道徳性と精神性についての問題を大学の講義のトピックスとして入れるほどであった。そして、1993年にウィリアムズと再婚した<sup>33)</sup>。

現在、ヘイドンは60年代世代を代表し、その世代の再評価をするための活動も行っている。1996年放映の『時代と格闘した男たち—反戦活動かの30年』<sup>34)</sup>の中でインタビューに答えて、シカゴでの28年前のデモを記念して彼自身が企画した「リターン トゥ シカゴ」について述べている。ヘイドンは言う、「私はヴェトナム戦争に反旗を翻した人々に敬意を示すことが必要だと考えました。当時からだいぶ時間が経ちましたが、これまで反戦運動はなんの評価も受けていません。今年また、シカゴで民主党大会が開かれると聞いて、当然ですが、思い出がまた蘇みがえってきました。我々はなにもかも忘れたわけではないのです。そういうわけで、あの時代を記念し、当時の理想を将来に伝えるなにかを企画しようと考えたのです。」とヴェトナム反戦運動の参加者を再評価し、60年代を振り返り言う、「70年代に入ると新たに環境問題、エネルギー、人種などの問題が出てきました。一方、18歳以上に選挙権が与えられ、人種差別のシステムは改善されました。政治参加の門戸はより広く開かれたのです。私はシステムがオープンになったのならば、その中へ入って行こうじゃないかと考えました。せつかく革命を起こしたのにそこで何もしなければ、革命の成果は他人に盗み取られてしまうかも知れません。時間の経過とともにいくらか変化したこともあります。基本的には昔と変わらない理想を主張し続け、人々の賛同を得るように努力しようと私は考えたのです。」と自らの60年代からの継続について述べている。

## 6 むすびに代えて

トム・ヘイドンのライフヒストリーを概観しながら、社会、歴史的文脈の中でのヘイドンの思想と行動の「変化と継続」に言及し、「1960年代世代」の代表である一人の知識人の生き方を考えた。ヘイドンは1960年代初期の「理想主義的リベラリズム」の影響を受け、



親たちが望んだ「アメリカの夢」を捨て、「社会的正義」を追求し、行動しようとした。しかし、その行動の過程で、「理想主義的リベラリズム」に基づいていたはずの民主党政権に不信感を持った。そして、政府によるヴェトナム戦争の激化、公民権運動への暴力の容認を見るにつけ、「リベラルな政権」は、「企業主義的リベラリズム」に過ぎず、その政権に対して異議を唱え、抗議し抵抗しなければいけないと考えた。しかし、その抵抗への「弾圧」に対して、「革命」を唱えたヘイドンは、その時に、「60年代」という時代の「終わり」を感じ、政治から距離を持った。

しかし、1970年代初期の『ペンタゴン・ペーパー』の『ニューヨーク・タイムズ』への記載、ウォーター・ゲート事件の発覚、ヴェトナム戦争の終結など「リベラル政権」に対する社会的批判が高揚するなかで、「システムが動く」ことを確信し、60年代初期に草案した「ポートヒューロン宣言」の理念を「草の根運動」を通して、「体制内政治」の中で実行しようと連邦上院選挙に出馬した。選挙では敗れたものの、ヘイドンにとっては「勝利」を意味し、その後、カリフォルニア州政府との関連で働き、1982年には下院議員として当選し、下院・上院の議員として「環境問題」「教育問題」「人権問題」「人種民族問題」などについての「体制内改革」を実行してきている。

以上のことから、現在のヘイドンは「理想主義的リベラリズム」の実行者であり、1960年代には行動面では「ラディカル化」していったが、1970年代以降は「成熟」し、「リベラリズム」の理想を「体制内政治」の場で実現しようとしたのではないと言えるであろう。このようなヘイドンの「公的」な問題は、彼の私的な個人史とのダイナミックな関係があるようだ。その個人史の事件の中で、10歳時の両親の離婚、親たちの「夢」に反する行動と南部公民権運動家のケーシーとの結婚、24歳の時の「両親との絶縁」により、政治的にラディカル化すると同時に親たちの世代と政府によって「見捨てられた」という思いが強くなった。そして、政治的弾圧と運動の衰退により、60年代の終りを実感した後は一時的には孤立したが、体制内での草の根的政治活動を再開し、「ジェーン・フォンダとの出会いと再婚（34歳）」により再び政治の舞台に戻り、「父親になったこと（34歳）」と「父親との絶縁解消（38歳）」でより成熟した政治家になった。そして、両親の死をきっかけに「中年期」を意識し60年代への旅としての回想録を書いた（48歳）ことが契機となり、フォンダと離婚した（49歳）。「3度目の家族の崩壊」<sup>36)</sup>の後、「宗教的な」環境問題活動家ウィリアムズと3度目の結婚（56歳）をし、より精神的なものを求めるヘイドンに変化している。そして、56歳に亡き両親たちに向けて、「法律家でなく、被告人になった息子より」というエッセイを『現代の成熟』という雑誌に投稿し、「60年代の自分」と「現在の自分」の「変化と継続」について述べ、60年代の親達世代の「リベラリズム」批判と「60年代の不幸」を回想している。このようなヘイドンの個人的な成熟の問題と世代の問題のダイナミックな関係は、60年代世代のほとんどに共通した側面を表現しているのではないであろうか<sup>36)</sup>。

参考文献

- 1) *San Francisco Chronicle* "Liberal Hayden Dreams of Running L.A." Jan.27, 1997.  
*Los Angeles Times*, Sunday April 13, 1997.
- 2) 拙論文, 1991年, 「アメリカ1960年代の意味—SDS トム・ヘイドンの回想録を中心に—」  
嵯山女学園大学研究論集, 第22号第1部, 189—200頁。
- 3) アラン・ブルーム (菅野盾樹訳) 1988『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房。
- 4) Collier, Peter and David Horowitz, 1989, *Destructive Generation: Second Thoughts About the Sixties* Summit Books, New York.
- 5) トッド・ギトリン (疋田三良, 向井俊二 訳) 1993年『60年代アメリカ』彩流社。
- 6) Flacks, Richard 1988, *Making History: The American Left and American Mind*.  
Columbia University Press, New York.
- 7) ケスラー, ローレン (亀井よし子訳), 1994年, 「アメリカの40代—希望は実現されたか」晶文社。
- 8) James M. Fendrich 1977, "Keeping the Faith or Pursuing the Good Life: A Study of the Consequences of Participation in the Civil Rights Movement," *American Sociological Review* 42, pp.144-157. James M. Fendrich and Kenneth L. Lovoy, 1988, "Back to the Future: Adults Political Behavior of Former Student Activist," *American Sociological Review* 53, pp.780-784.
- 9) Whalen, Jack and Richard Flacks, 1989, *Beyond the Barricades: The Sixties Generation Grows Up* Temple University Press, Philadelphia.
- 10) The Port Huron Statement, 1962.
- 11) Hayden, Tom, 1988, *Reunion: a memoir* Random House, pp.105-120.
- 12) 前掲書, pp. 123-150
- 13) 前掲書, p.164
- 14) 前掲書, pp.291-326
- 15) 前掲書, pp.272-284
- 16) Hayden, Tom, 1996, "Your son became a defendant instead of a lawyer" *Modern Maturity* January-February, p.49,
- 17) Unger, Craig, 1989, "Tom Hayden's Original Sin", *Esquire*, June. pp.179-191,
- 18) Hayden, 前掲書, pp.435-439
- 19) 前掲書, p.467
- 20) ヘイドン, トム (現代アメリカ研究集団訳), 1982年, 「アメリカに未来はあるのか I, II」新評社。
- 21) Hayden, 前掲書, p.469
- 22) 前掲書, p.475
- 23) 前掲書, pp.471-472
- 24) Hayden, Tom, 1996, "Finding cracks in the ivory tower" Thursday, April 25, *Daily Bruin* (Michael Howerton)
- 25) Hayden, Tom and Connie Rice, 1995, "California Cracks Its Mortarboards" *The Nation*, Sept.18. pp.264-266
- 26) Hayden, Tom, 1996, *The Lost Gospel of the Earth* by Tom Hayden Living On Earth Interview (World Media Foundation)

- 27) 1997年5月の段階でのインターネット上の資料参照：Search of Current Session Bills: Results of search for Haydenがホームページにリンクされ、その時点でヘイドンによって提出されている法案の原文とその修正案などの関連した議論が記載されている。タイトルと内容から以下のような分類が可能であろう。
- ・環境問題に関するもの17法案、宗教的側面の考慮を指摘：  
SB70: Health coverage, SB75: Endangered species, SB560: Regulated chemicals surtax, BS1006: Marine life refuges, BS1117: Environmental quality, BS1119: Coastal resources, BS1120: Natural community conservation plans, BS1123: Sportfishing, BS1187: Animal control, BS1188: Los Angeles River, BS1189: Drinking water, BS1190: Trees, BS1201: Very high fire hazard severity zones, BS1202: Historic site preservation, BS1203: Air pollution, BS1228: Wildlife, BS1247: South Coast Air Quality Management District
  - ・教育問題に関する6法案、「教育弱者」の救済と「地域と学校の関係」を指摘：  
BS101: Education security Act of 1997, BS195: Bonds, BS316: Statewide Student Service Corps, BS843: Charter school, BS1001: Public social service, BS1031: Education
  - ・都市問題、犯罪問題に関する11法案、犯罪の防止、住み良い都市計画を指摘：  
BS89: Transportation, BS513: Firearms, BS526: Criminal procedure, BS790: Transportation, BS794: transportation, BS811: Vehicles, BS812: Vehicles, BS980: Crime prevention, BS1029: Redevelopment
  - ・経済政策と人権問題に関する5法案、中小企業への援助、「社会的弱者」への援助：  
BS841: Public contracts, BS842: Bank and corporation, BS948: Real property, BS963: AFDC, BS1076: Employment
- 28) Hayden, Tom, 1996, "Unfinished Business: Can We Beat the Special-Interest State?" *The Nation* Sept.9/16 pp.11-14.
- 29) Hayden, 前掲書, pp.485-501
- 30) Unger, 前掲論文, p.180
- 31) Stewart, Jill, 1995, "TOM HAYDEN, REBORN....AGAIN", Buzz(Internet).
- 32) Unger, 前掲論文, p.191
- 33) Stewart, 前掲論文。
- 34) 「時代と格闘した男たちー反戦活動家の30年」NHK ETV 特集, 1996年11月26日。
- 35) Unger, 前掲論文, p.191
- 36) McAdam, Doug, 1988, *Freedom Summer* Oxford University Press, New York. 拙論文, 1992年, "Social Movement Participation and Life Course: A Study of the Sixties Generation in the U.S." 梶女学園大学研究論集, 第23号第1部, 113-123頁。